第５３回名古屋春栄会
演目のあらまし

平成２９年１月１５日

名古屋春栄会事務局

目　　次

翁（おきな）　……　１
鶴亀（つるかめ）　……　２
七騎落（しちきおち）　……　３
天鼓（てんこ）　……　４
放下僧（ほうかぞう）　……　５
加茂（かも）　……　６
小塩（おしお）　……　７
自然居士（じねんこじ）　……　８
放下僧（ほうかぞう）　……　９
嵐山（あらしやま）　……　１１
羽衣（はごろも）　……　１２
猩々（しょうじょう）　……　１３
是界（ぜがい）　……　１４
高砂（たかさご）　……　１５

〔能のミニ知識　……　１６〕

このリーフレットは、第５３回名古屋春栄会の演目を解説したものです。
演目の記載順は、番組の順です。
詞章については、金春流の謡本から転載しました。

翁（おきな）

【作　者】　不詳
【登場人物】　シテ：翁（面・翁）、狂言：千歳、狂言：三番叟

【概要】（素謡の部分…シテが退場するところまで）

翁は「能にして能にあらず」と言われています。演劇性を持たない、天下泰平、国土安全、五穀豊穣を祈願する儀式としての舞のみの能です。翁、千歳、三番叟の３人がそれぞれ別に舞を舞います。颯爽たる千歳の舞、荘重な翁の舞と続き、その後、翁は退場し、千歳と三番叟の問答の後、三番叟が「揉之段」と「鈴之段」とい２つの力強い舞を舞います。

【詞章】

シテ　どうどうたらりたらりら。たらりららりららりどう。
地謡　ちりやたらりたらりら。たらりららりららりどう。
シテ　所千代までおわしませ。
地謡　われらも千秋さむらおう。
シテ　鶴と亀との齢にて。
地謡　幸ひ心にまかせたり。
シテ　どうどうたらりたらりら。
地謡　ちりやたらりたらりら。たらりららりららりどう。
千才　鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水。日は照るとも。
地謡　たえずとうたり。ありうどうどう。
千才　たえずとうたり。たえずとうたり。
　＜千才舞＞
千才　所千代までおはしませ。われらも千秋さむらおう。鳴るは瀧の水。
　　日は照るとも。
地謡　たえずとうたり。ありうどうどう。
　＜千才舞＞
シテ　あげまきやとんどや。
地謡　よばかりやとんどや。
シテ　ざしていたれども。
地謡　まいろうれんげじや。とんどや。
シテ　千早ふる。神のひこさの昔より。ひさしかれとぞよわい。
地謡　そよやりちや。とんどや。
シテ　千年の鶴は。万才楽と歌うたり。又万代の池の亀は。甲に三極を備えり。
　　天下泰平国土安穏。今日のご祈祷なり。ありわらや。なじょの翁ども。
地謡　あれはなじょの翁ども。そやいづくの。翁ども。

シテ　そよや。

＜翁舞＞

シテ　千秋万才の。喜びの舞なれば。一舞まおう万才楽。

地謡　万才楽。

シテ　万才楽。

地謡　万才楽。

鶴亀（つるかめ）

【分　類】初番目物（脇能＝唐物）　＊楽

【作　者】不詳

【主人公】シテ：皇帝（直面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

昔、中国では年の始めに、華麗な宮殿で、四季の節会の最初の儀式が行われました。まず、官人が出て、御代を讃え、皇帝が月宮殿に行幸なる由を触れます。皇帝は大臣たちを従えて登場し、宮殿に着座して、群臣から拝賀を受けます。ついで大臣は毎年の嘉例により、鶴亀を舞わせることを奏聞します。池の水ぎわに遊ぶ鶴と亀は、皇帝の長寿を讃えてめでたく舞い納めると、皇帝も喜び、国土の繁栄を祝って、自ら舞を舞い、やがて長生殿へと帰っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

月宮殿の白衣の袂。月宮殿の白衣の袂の。いろいろ妙なる。花の袖。秋は時雨の紅葉の葉袖。冬は冴えゆく雪の袂を。ひるがえす衣も薄紫の。雲の上人の舞楽のかずかず。げいしょう羽衣の曲をなせば。山河草木国土豊に千代万代と．祝い奉り。官人駕輿丁御輿を早め。君の齢も長生殿に。君の齢も長生殿に。還御なるこそ．めでたけれ。

七騎落（しちきおち）

【分　類】四・二番目物（侍物）　＊男舞
【作　者】不詳
【主人公】シテ：土肥実平（直面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

治承４（1180）年８月、石橋山の合戦に敗れた源頼朝は、他日を期して安房上総の方へ落ちのびようとします。そして、一行の軍師格の土肥実平に、船の用意を命じます。ところが、いざ漕ぎ出そうとして船中を見ると、主従の人数が八人でした。頼朝は、祖父為義が九州へ落ちた時も八騎であり、父義朝が近江へ敗走した時も八騎であったことを思い出し、不吉の数だから、一人を降ろすように命じます。実平は、いずれも忠義の者ばかりで選びかねた末、最長老の岡崎義実を降ろそうとしますが、彼は承知しません。やむなく我が子遠平を下船させ、一行は親子の別れに同情しつつも、船を沖に進めます。遠ざかる陸を見ると、敵の数は多く、遠平は討死するに違いないと、実平は心ひそかに悲しみます。翌日、沖合で和田義盛が頼朝の船を捜し出し、声をかけてきます。実平は義盛の心を試すため、主君はいないと偽ります。すると、義盛はそれでは生きているかいがないと、腹を切ろうとするので、これを止め、近くの浜辺に船を寄せて頼朝に対面させます。そこで、義盛は実平に向い、遠平は自分が助けて来たと言い、父子を引き合わせます。実平は夢かとばかり喜び、父子は抱き合います。そして一同は酒宴を催し、実平はすすめられて喜びの舞を舞います。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

かくて時日をめぐらさず。かくて時日をめぐらさず。西国のつわもの馳せ参ずれば。ほどなくおん勢二十万騎になり給いつつ。たなごころにて治め給えるこの君の御代の。めでたきためしも実平正しき忠勤の道にいる。実平正しき。忠勤の道にいる。弓矢の名をこそあげにけれ。

天鼓（てんこ）

【分　類】　四番目物（遊楽物・唐物）　＊楽
【作　者】　不詳
【主人公】　前シテ：天鼓の父・王伯（面・小尉）、
　　後シテ：天鼓の霊（面・童子）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

昔、中国に王伯王母という夫婦がいました。妻は天から鼓が降り下り、胎内に宿る夢を見て一子を生み、その名を天鼓とつけました。その後本物の鼓が天から下り、その子供の手に入ります。それは実に美しい音を出します。その噂を伝え聞いた天子が、鼓を献上するように命じます。少年はそれを拒んで山中に逃げたが、探し出され、鼓は召し上げられ、その身は呂水に沈められてしまいます。宮中に運び込まれたその鼓は、その後、誰が打っても音を出しません。［ここまでは能では演じられません］
そこで、勅使が少年の老父のもとにつかわされ、宮中へ来て鼓を打つように命ぜられます。愛児を失った老父は、日夜悲嘆にくれていますが、勅命を受け、自分も罰せられる覚悟で参内します。恐れかつ懐かしむ心で鼓を打つと、不思議にも妙音を発しました。この奇跡に、天子も哀れを感じ、老父に数多の宝を与えて帰らせます。
＜中入＞
そして天鼓のために、呂水の堤で、追善の管絃講（音楽法要）を行います。<u>すると天鼓の霊が現われ、今は恨みも忘れて手向けの舞楽を謝し、自ら供えられた鼓を打ち、楽を奏し、喜びの舞を舞って興じます。</u>

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

おもしろや時もげに。おもしろや時もげに。秋風楽なれや松の風。柳葉を。払って月も涼しく。星も相逢う空なれや。烏鵲の橋のもとに。紅葉を敷き。二星の館の前に風冷やかに夜もふけて。夜半楽にも早なりぬ。人間の水は南。星は北にたんだくの。天の海面雲の波。立ちそうや呂水の堤の。月にうそむき水にたわむれ．波をうがち。袖を返すや。夜遊の舞楽も時去りて。五更の一点鐘も鳴り。鳥は八声のほのぼのと。夜も明け白む時の鼓。数は六つの巷の声に。また打ち寄りて現か夢か。またうち寄りて現か夢．幻とこそなりにけれ。

放下僧（ほうかぞう）

【分　類】　四番目物（現在物）　＊羯鼓〔かっこ〕
【作　者】　不詳
【主人公】　前シテ：禅僧・小次郎の兄（直面）、後シテ：小次郎の兄（直面）

【あらすじ】（今回の独吟の部分…下線部）

下野国（栃木県）の住人、眞木野左衛門は、相模国（神奈川県）の刀禰信俊と口論の末、打ち果たされてしまいます。その子の眞木野小次郎は、父の無念を思い、信俊を敵とつけ狙いますが、相手は大勢、こちらは唯一人で思うにまかせません。そこで、幼少から出家している兄に力を求めるべく、禅学修行中の学寮へ訪ねて行きます。そして一緒に仇討に出立しようと促しますが、兄は出家の身を思い、ためらいます。小次郎は、親の敵を打たぬのは不孝であるといい、母を殺した虎をねらって、百日、野に出、虎と見誤って大石を射たが、一心が通じて矢は突き立ち、血が流れた、という中国の故事を物語ります。兄も弟の熱意に動かされ、仇討に同意します。そして二人は談合の末、敵に近寄る方便として、当時流行の放下僧と放下に変装して、故郷に名残りを惜しみつつ出発します。
＜中入＞
一方、利根信俊は夢見が悪いため、瀬戸の三島神社への参詣を志します。道中、放下が来るというので、従者が旅の徒然にと呼び寄せます。小次郎兄弟は、浮雲・流水と名乗り、信俊に近づきます。そして、兄は自分の持つ団扇のいわれを、弟も携えた弓矢のことを面白く説きます。つづいて禅問答に興じ、曲舞や羯鼓、小歌などさまざまな芸を見せていきます。そして、相手の油断を見すまし、兄弟ともども斬りかかって、首尾よく本望をとげます。

【詞章】（今回の独吟の抜粋）

面白の。花の都や筆に書くとも及ばじ。東には。祇園清水落ちくる滝の。音羽の嵐に地主の桜はちりぢり。西は法輪。嵯峨の御寺廻らば廻れ。水車の輪のいせき井堰の川波。川柳は。水に揉まるるふくら雀は。竹に揉まるる野辺のすすきは。風に揉まるる都の牛は。車に揉まるる茶臼は挽木に揉まるる。げにまこと。忘れたりとよこきりこは放下に揉まるる。こきりこの。二つの竹の。代々を重ねてうち治めたる御代かな。いつまでかくてあるべきと。おとといともに．抜きつれて。この年月の怨みのすえ。今こそ通れ願いのままに。敵をぞ討ったりける。かくて兄弟念力の。かくて兄弟念力の。その期のありてたちまちに。親の敵を討つ事も。孝行深き故により。名を末代に留めけり。名を末代に．留めけり。

加茂（かも）

【分　類】初番目物　（脇能）　＊舞働
【作　者】金春禅竹
【主人公】前シテ：水汲女（面・増女）、後シテ：別雷の神（面・大飛出）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

播州（兵庫県）の室の明神と都の加茂明神とは御一体であるというので、室の明神に使える神職が都へ上り、加茂の社に参詣します。すると、その川辺に新しい壇が築かれ、白木綿に白羽の矢が立ててあります。それを見て、不審に思い、ちょうどそこへ水を汲みにやって来た二人の女に尋ねます。女は「昔、この里に住んでいた秦の氏女が、朝夕この川の水を汲んで、神に手向けた。ある時、川上から白羽の矢が流れてきて水桶に止まったので、持ち帰って家の軒にさしておくと懐胎して男子を産んだ。この子と母、そして白羽の矢で示された別雷〔わけいかづち〕の神を加茂三社の神というのです」と、加茂三社の縁起を語ります。続いて、水を汲みながら川に因んだ歌をひき、その流れの趣を語り、やがて自分が神であることをほのめかして消え失せます。
＜中入＞
しばらくして、女体の御祖神〔みおやのしん〕が姿を現して舞をまい、続いて別雷の神が出現して、国土を守護する神徳を説き、猛々しい神威を示した後、御祖神は糺の森へ、別雷の神は虚空へと飛び去っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋です。）

風雨随時の御空の雲居。風雨随時の御空の雲居。別雷の雲霧をうがち。光稲妻の稲葉の露にも。宿る程だに鳴る雷の。雨を起して降りくる足音は。ほろほろ。ほろほろとどろとどろと踏みとどろかす。鳴神の鼓の。時もいたれば五穀成就も国土を守護し。治まる時にはこの神徳と。威光を現わしおわしませば。御祖の神は。糺の森に。飛び去り飛び去り入らせたまえばなお立ちそうや雲霧を。別雷の。神も天路によじのぼり。神も天路によじのぼって。虚空にあがらせ給いけり。

小塩（おしお）

【分　類】三・四・五番目物（切能・美男物）　＊序ノ舞
【作　者】金春禅竹
【主人公】前シテ：老人（面：三光尉）、後シテ：在原業平の霊（面：中将）

【あらすじ】（仕舞[キリ]の部分…下線部）

大原山の桜が満開だと聞いた都の男が、仲間と一緒に花見に出かけます。すると見物客の中に、手折った桜の枝をかざす老人がいます。男が声をかけると、老人は、姿は鹿のように下卑ているかもしれないが、心は風雅に満ちていると言い、男たちと合流します。老人が「大原や小塩の山も今日こそは、神代のことを思ひ出づらめ」という和歌を口にしたので、男が作者名を尋ねると、在原業平が詠んだ歌であると答え、いずことなく消えてしまいます。
＜中入＞
先の老人は在原業平の霊に違いないと考えた男たちは、桜の木の下で経を唱え始めます。そこへいつの間にか、業平の乗った高貴な雰囲気の漂う花見車が現れます。業平は春の宵には思い出が甦り、その思いが和歌となるのだと言い、さまざまな例を挙げ、和歌の徳を称えます。そして、人の思い出は、いずれも恋心に関したものだと語り、<u>二条の后との思い出に耽りながら舞をまいます。やがて月が白み、夜が明け始める頃、男たちが目覚めると、業平の姿は消えていました。</u>

【詞章】（仕舞[キリ]の部分の抜粋）

昔かな。花も所も。月も春。ありし御幸を。花も忘れじ。花も忘れぬ。心や小塩の。山風ふき乱れ．散らせや散らせ。散り迷う木のもとながら。まどろめば。桜に結べる。夢か現か世人定めよ。夢か現か世人定めよ。寝てか覚めてか。春の夜の月。曙の花にや。残るらん。

自然居士（じねんこじ）

【分　類】四・五番目物（芸尽物・喝食物）　＊中ノ舞／羯鼓
【作　者】観阿弥
【主人公】シテ：自然居士（面・大喝食）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

東山雲居寺（京都市）門前の男が、自然居士が雲居寺造営のため七日間の説法を行っていることを述べ、今日が結願の日であると告げます。やがて自然居士が登場し、説法を始めると、一人の少女が、小袖を供え、両親追善のために読経を願う文を持って来ます。居士はその文を開き読み上げます。そこへ二人の人商人が現れ、昨日買い取った少女がまだ戻らないので探していると言い、少女を見つけると引き立てて行きます。少女は、自分の身を売って求め得た小袖を、布施に供えたことがわかり、居士も集まった人々もその哀れさに同情の涙をもよおします。居士は仏法修行をここで捨ててでも、少女を救おうと結願目前の説法を中止し、小袖を抱えて人商人たちの後を追います。そして、大津の浜でちょうど船出しようとしている人商人たちに追いつきます。居士は、小袖を投げ返し、着物の裾を波に濡らして舟にすがりついて引き止め、少女を戻してくれるように頼みます。しかし、人商人は、一度買ったらもう戻さぬのが決まりとうそぶきます。居士は、不幸せな者を救うことができないなら、雲居寺には戻らぬ、この少女とともに陸奥国まで行こう、たとえ命を取られても舟からは降りぬと答えます。居士の気迫に押され気味の人商人は、居士なぶりに転じ、どうしても少女を返して欲しいなら、今ここであれこれ芸をやってみせろと迫ります。居士はよかろうと言って、芸尽くしを始めます。中之舞から曲舞を舞い、ササラをすり、羯鼓を打って、舞に舞います。こうして、やっと人商人から少女を取り戻し、ともに都へ帰ります。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

黄帝の臣下に。貨狄といえる士卒あり。ある時貨狄庭上の。池の面を見渡せば．おりふし秋の末なるに。寒き嵐に散る柳の．一葉水に浮みしに。また蜘蛛という虫。これも虚空に落ちけるが．その一葉の上に乗りつつ。次第次第にささがにの．糸はかなくも柳の葉を。吹きくる風にさそわれ。汀に寄りし秋霧の。立ちくる蜘蛛の振舞。げにもと思いそめしよりたくみて舟を作れり。黄帝これに召されて。烏江を漕ぎ渡りて．蚩尤を安く亡し。おん代を治めたもう事。一万八千歳とかや。しかれば舩のせんの字を。公にすすむと書きたり。さてまた天子のおん舸を。竜舸と名づけ奉り。舟を一葉という事。この御宇より始まれり。また君のご座舟を。竜頭鷁首と申すも．このみ代より起れり。

放下僧（ほうかぞう）

【分　類】　四番目物（現在物）　＊羯鼓〔かっこ〕
【作　者】　不詳
【主人公】　前シテ：禅僧・小次郎の兄（直面）、後シテ：小次郎の兄（直面）

【あらすじ】（今回の連吟の部分…下線部）

下野国（栃木県）の住人、眞木野左衛門は、相模国（神奈川県）の刀禰信俊と口論の末、打ち果たされてしまいます。その子の眞木野小次郎は、父の無念を思い、信俊を敵とつけ狙いますが、相手は大勢、こちらは唯一人で思うにまかせません。そこで、幼少から出家している兄に力を求めるべく、禅学修行中の学寮へ訪ねて行きます。そして一緒に仇討に出立しようと促しますが、兄は出家の身を思い、ためらいます。小次郎は、親の敵を打たぬのは不孝であるといい、母を殺した虎をねらって、百日、野に出、虎と見誤って大石を射たが、一心が通じて矢は突き立ち、血が流れた、という中国の故事を物語ります。兄も弟の熱意に動かされ、仇討に同意します。そして二人は談合の末、敵に近寄る方便として、当時流行の放下僧と放下に変装して、故郷に名残りを惜しみつつ出発します。
＜中入＞
一方、利根信俊は夢見が悪いため、瀬戸の三島神社への参詣を志します。道中、放下が来るというので、従者が旅の徒然にと呼び寄せます。小次郎兄弟は、浮雲・流水と名乗り、信俊に近づきます。そして、兄は自分の持つ団扇のいわれを、弟も携えた弓矢のことを面白く説きます。つづいて禅問答に興じ、曲舞や羯鼓、小歌などさまざまな芸を見せていきます。そして、相手の油断を見すまし、兄弟ともども斬りかかって、首尾よく本望をとげます。

【詞章】（今回の連吟の抜粋）

およそ沙門といっぱ。忍辱二諦の衣を着。罪障懺悔の袈裟をかけ。十力の数珠を手にまといてこそ僧とは申すべけれ。異形のいでたち心得ず候。また柱杖に団扇をつけて持ちたもう。団扇の一句承りとう候。それ団扇と申すは。動くときは清風を出だし。静かなる時は明月を見す。明月清風ただ同性。諸法を心が所作として。心地修行の種なれば。われらが持つは道理なり。とがめたもうぞ．愚かなる。団扇の一句おもしろう候。さて今一人は弓箭を帯し持ちたもう。これもお僧の道具ぞうか。それ弓と申すは。本末に烏兎の形ちを現わし。浄穢不二の秘法を表す。されば愛染明王も。神通の弓に知恵の矢を持って。四魔の軍を．破りたもう。さればわれらも．これを持ち。さればわれらもこれを持ち。引かぬ弓。放さぬ矢にて射るときは。当らずしかも。はずさざりけりと。かように詠む歌もあり．知らずなものなのたまいそ。知らずなものな．のたまいそ。放下僧とはいづれの祖師。禅佛は何と御傳え候ぞ。宗体が承りたう候。われらが宗体と申すは。教外別傳にしていうもいわれず。

説くも説かれず。言句に出だせば教に落ち。文字を立つれば宗体にそむく。ただ一葉のひるがえる。風の行くえをご覧ぜよ。げに面白う候。さて座禅の公案なにと心得候べき。入っては幽玄の底に徹し。出でては三味の門に遊ぶ。自身自仏はさていかに。白雲深き所金竜おどる。生死に住せば。輪回の苦。生死を離れば。断見の科。さって向上の一路は。切って三段となす。ああ切って三段となすとは。われらが禅法の言葉なるを。お騒ぎあるこそ．愚かなれ。なにとただなかなかに．岩根の山の岩つつじ．色には出でじ．南無三宝．おかしの人の．心や。

嵐山（あらしやま）

【分　類】　初番目物（脇能＝荒神物）　＊中ノ舞
【作　者】　金春禅鳳
【主人公】　前シテ：花守の老人（面・小尉）、後シテ：蔵王権現（面・大飛出）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

嵯峨帝に仕える臣下が、勅命を受けて、嵐山へ桜の咲き具合を見に行きます。というのは大和吉野山が桜の名所であることは有名ですが、あまりに都から遠いので、花見の御幸も簡単にはできません。それで吉野の千本の桜を、都近くの嵐山に移し植えられましたが、吉野の花が今は盛りだというので、嵐山の花もよく咲いているのではないか、というお尋ねがあったからです。勅使一行が嵐山につくと、老人夫婦が現れ、木陰を清め、花に向って祈念します。勅使がその謂れを聞くと、老人夫婦は、この千本の桜は、吉野から移されたものだから、木守、勝手の二神が時折現れて守護する神木であり、嵐という名だが、花を散らさないのだと語ります。やがて自分達こそ木守、勝手の神なのだと名乗り、再会を約して、雲に乗って吉野の方に飛び去ります。
＜中入＞
そのあと、蔵王権現の末社の神が現れ、勅使一行に対して舞を舞ってもてなしていると、木守、勝手の二神が今度は神の姿で現れ、嵐山の美景を眺めつつ舞楽を奏します。続いて蔵王権現も現れて、衆生の苦患を助け、国土を守ると誓い、栄ゆる御代を祝福します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

和光利物の御姿。和光利物の御姿。我本覚の都を出でて。分段どうごの塵に交わり。金胎両部の一足をひっさげ。悪業の衆生の苦患を助け。さて又虚空に御手を上げては。たちまち苦海の煩悩を払い。悪魔降伏の青蓮のまなじりに。光明を放つて。国土を照らし。衆生を守る。誓を現わし。子守勝手。蔵王権現一体分身同体異名の姿を見せて。おのおの嵐の山によじ登り。花にたわむれ梢にかけって。さながらここ黄金の峰の。光も輝く千本の桜。光も輝く千本の桜の。栄ゆく春こそ。久しけれ。

羽衣（はごろも）

【分　類】　三番目物（鬘物＝精天仙物）　＊序ノ舞
【作　者】　不詳
【主人公】　シテ：天人（面・増女）

【あらすじ】（仕舞［キリ］の部分…下線部）

駿河国（静岡県）三保の松原に住む白龍という漁師が今日も釣にやって来ます。そして、のどかな浦の景色を眺めていると、いい匂いがしてきます。あたりを見廻すと、一本の松の木の枝に美しい衣がかかっています。そこで、家宝にでもしようと持って帰りかけると、一人の女性が現れて呼び止め、それは自分のものだから返してほしいと頼みます。その女性が天人であり、その衣が天の羽衣であることを聞かされた白龍は、そんなに珍しいものかと喜び、国の宝にしようと返そうとしません。天人は羽衣がなくては天に帰れないと、空を仰いで嘆き悲しみます。その姿があまりに哀れなので、白龍は、羽衣を戻すかわりに、天人の舞楽を見せてほしいと頼みます。天人は喜んで承知し、羽衣を着て月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色をたたえた舞を舞いながら、天空へと上っていきます。

【詞章】（仕舞［キリ］の部分の抜粋）

あずま遊びのかずかずに。あずま遊びのかずかずに。その名も月の。色人は。三五夜中の空にまた。満願真如の影となり。御願円満国土成就。七宝充満の宝をふらし。国土にこれを施したもう。さるほどに。時移って。天の羽衣。浦風にたなびきたなびく。三保の松原浮き島が雲の。足高山や富士の高根。かすかになりて天つみ空の。霞にまぎれて失せにけり。

猩々（しょうじょう）

【分　類】五番目物（祝言物）　＊中ノ舞
【作　者】不詳
【主人公】シテ：猩々（面・猩々）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

親孝行で評判の高い高風という男が、揚子の市で酒を売ると富貴の身になるという夢を見、そのお告げのとおりに酒を売って金持ちになりました。その高風の店に来て酒を飲む者で、いくら飲んでも顔色が変わらない者がいるので、ある日、名を尋ねると海中に住む猩々だと明かして帰っていきました。そこで、高風はある月の美しい夜に潯陽の江のほとりに酒壺を置き、猩々の出てくるのを待つことにします。やがて、猩々は薬の水とも菊の水とも呼ばれる銘酒の味をみたい、よき友と会うことを楽しみに、波間から浮かび出て、高風と酒を酌み交わします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音を奏で、波の音は鼓の調べのように響きます。この天然の音楽にのって、猩々は舞い出します。そして高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

よも尽きじ。よも尽きじ。万代までの竹の葉の酒。汲めども尽きず。飲めども変らぬ。秋の夜の盃。影も傾く入江に枯れ立つ。足元はよろよろと。酔いに伏したる枕の夢の。覚むると思えば泉はそのまま。尽きせぬ宿こそ。めでたけれ。

是界（ぜがい）

【分　類】五番目物（切能＝天狗物）　＊イロエ／舞働
【作　者】竹田法印宗盛
【主人公】前シテ：是界坊（直面）、後シテ：是界坊（面・大癋見）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

中国の天狗の首領である是界坊は、中国において高慢の僧を残らず天狗道に誘い入れたので、次は、日本の仏法を妨げようと日本にやって来ます。そして、日本に渡ってくると、まず愛宕山の天狗の太郎坊を訪ね、相談し、比叡山を襲うことにします。語り合ううちに不動明王の威力が恐ろしく弱気になりますが、やがて決心して太郎坊の案内で比叡山に向います。
＜中入＞
比叡山の僧が勅命を受け、参内しようと下山すると、にわかに嵐が起こり天地が震動して、是界坊が天狗本来の姿で現れます。そして、僧を魔道に誘い入れようとするので、僧は悪魔降伏のため不動明王を念ずると、不動明王は矜羯羅童子と制多迦童子を従えて、十二天とともに現れます。また、日吉、石清水、松尾、北野、賀茂の神社の神々も現れて、是界坊に襲いかかります。是界坊も負けじと奮闘しますが、仏力・神力に翻弄され、さすがの是界坊も力を失って、もう決して日本には来ないと言って、中国に退散します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

明王諸天は．さておきぬ。明王諸天は．さておきぬ。東風ふく風に。東をみれば。山王権現。南に男山西に松の尾北野や加茂の。神風松風ふきはらえば。さしもに飛行のつばさも地に落ち．力もつき弓のやしまの浪の。たちさると見えしが又とび来たり。さるにても。かほどに妙なる佛力神力．今よりのちは。来たるまじと。いう声ばかりは虚空にのこり。いう声ばかりは虚空にのこって。姿は雲にぞ。入りにける。

高砂（たかさご）

【分　類】初番目物（脇能＝男神物）　＊神舞
【作　者】世阿弥
【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：住吉明神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

肥後国（熊本県）、阿蘇の宮の神主・友成は、都見物を思い立ち旅に出ます。途中、播州（兵庫県）高砂に立ち寄り、浦の景色を眺めていると、そこへ竹杷（熊手）と杉箒を持った老夫婦がやって来て、松の木陰を掃き清めます。友成は、有名な高砂の松はどれかと尋ね、また、高砂の松と住吉の松とは場所が離れているのに、なぜ相生の松と呼ばれるのかと、その理由を尋ねます。老人は、この松こそ高砂の松であると語り、たとえ場所を隔てていても夫婦の仲は心が通うものだ、現にこの姥は当所の者、尉は住吉の者だと言います。そして老夫婦は、さまざまな故事を引いて松のめでたさを語り、御代を寿ぎます。やがて二人は、実は相生の松の精であることを明かし、住吉でお待ちしていると告げて、小舟に乗って沖の方へ消えていきます。

＜中入＞

友成は、土地の者に再び相生の松のことについて聞き、先程の老夫婦の話をすると、それは奇特なことだから、早速自分の新造の舟に乗って住吉へ行くことを勧められます。そこで、友成たちも高砂の浦から舟で住吉へ急ぎます。住吉へ着くと、残雪が月光に映える頃、住吉明神が出現し、千秋万歳を祝って颯爽と舞います。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

げにさまざまの舞姫の。声もすむなり住の江の。松陰もうつるなる．青海波とはこれやらん。神と君との道すぐに。都の春にゆくべくは。それぞ還城楽の舞。さて万歳の。小忌衣。指すかいなには。悪魔を払い。おさむる手には。壽福をいだき。千秋楽は民をなで。万歳楽には命をのぶ。相生の松風。さっさっの声ぞ楽しむ．さっさっの声ぞ樂しむ。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番（五曲）が正式とされています。異なる雰囲気のものを効果的に組み合わせるノウハウとして、神（神がシテ）・男（修羅に苦しむ男性がシテ）・女（美しい女性がシテ）・狂（狂女などがシテ）・鬼（鬼畜がシテ）の順に演じます。ただし、鬼がシテ（五番目物）であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある（略脇能物）など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物（脇能）

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物（修羅能）

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといいます。シテ（主に源平の武将の亡霊）が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物（鬘〔かづら〕物）

シテ（『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など）が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物（雑能）

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の 「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物（切〔きり〕能）

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン（一番）からキリ（最後）まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方〔はやしかた〕…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の 4 種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛（能管）：竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓：左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓：左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓：台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡〔すうたい〕

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

独吟〔どくぎん〕

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

連吟〔れんぎん〕

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

仕舞〔しまい〕

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う（通常 5 分程度）。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡（ボーカル）だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物（大道具）は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

舞囃子〔まいばやし〕

舞事・働事（囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」）を中心に、シテが地謡と囃子（器楽）をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して 10～20 分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物（大道具）は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

袴能〔はかまのう〕

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

半能〔はんのう〕

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

独調〔どくちょう〕、独鼓〔どっこ〕、一調〔いっちょう〕

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

一管〔いっかん〕

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

一調一管〔いっちょういっかん〕

打楽器のうち一種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

素囃子〔すばやし〕

舞事・働事などの部分を、囃子（楽器）によって聞かせるもの。

番囃子〔ばんばやし〕

謡と囃子（音楽的要素）のみで、能一番を聞かせるもの。

★舞事と働事

舞事〔まいごと〕…抽象的な純粋舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

〇序ノ舞：ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

〇真ノ序ノ舞：老体の神の荘重な舞

〇中ノ舞：基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

〇早舞：拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の中間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

〇神舞：若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

〇急ノ舞：テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

〇破ノ舞：序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

〇神楽：「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

〇楽〔がく〕：舞楽のような感じの舞です。
中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

〇羯鼓〔かっこ〕：羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。
「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事〔はたらきごと〕…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

〇イロエ：囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

〇カケリ：「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。
精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

〇祈リ：鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。
「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

〇舞働〔まいばたらき〕：龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。
働〔はたらき〕ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

http://www.syuneikai.net